

第1回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

- (1) 新任委員の紹介
- (2) 事務局の紹介
- (3) 協議事項
今年度の社会教育委員会議の協議テーマについて
- (4) 連絡事項

2 日時

令和6年(2024年)8月20日(火) 10時00分～12時00分

3 場所

STV北2条ビル6階 教育委員会A・B会議室

4 出席者

- (1) 委員(出席9名)
出口議長、片岡副議長、小田島委員、小野寺委員、高原委員、
松岡委員、今泉委員、安田委員、臼井委員
- (2) 事務局(7名)
井上生涯学習部長、大瀬生涯学習推進課長、
釜石社会教育担当係長、中原社会教育担当職員、大山職員
橋本職員、野上職員

5 開催形態

公開(マスコミ関係者:北海道通信社1名)

6 会議内容

【配布資料】

- 資料1:今年度の社会教育委員会議の協議テーマについて
資料2:札幌市の進める地域学校協働活動推進事業について
資料3:社会教育委員名簿

資料4：座席表

(1) 教育長挨拶

会議に先立ち今年度着任した山根教育長より挨拶

(2) 新任委員の紹介

中野委員（前札幌市PTA協議会会長）の退任に伴い、7月8日付で新たに就任した札幌市PTA協議会会長の高原委員より挨拶

(3) 事務局の紹介

(4) 協議事項（事務局説明）

① 今期の社会教育委員会議の進め方について

ア 事務局より、資料1「今年度の社会教育委員会議の協議テーマについて」を用いて提案（釜石係長）

以下、説明の要旨

- ・テーマ案「地域学校協働活動を通じた地域づくり」について
- ・協議の進め方について
- ・今回の熟議テーマについて
- ・令和6年度の会議スケジュールについて

イ 主な質疑応答・意見

→異議なし（全委員）

② 札幌市の進める地域学校協働活動推進事業について

ア 事務局より、資料2「札幌市が進める「地域学校協働活動」」を用いて説明（中原職員）

以下、説明の要旨

- ・地域学校協働活動について
- ・札幌市における地域学校協働活動の取組について
- ・令和6年度地域学校協働活動推進事業について
- ・小学校における地域学校協働活動の取組事例について
- ・中学校における地域学校協働活動の取組事例について
- ・札幌市地域学校協働活動推進員について
- ・地域学校協働活動推進員の取組事例について

イ 熟議

今年度も2グループに分かれて、熟議を行う。事前に事務局でグループを決定した。熟議の内容を各グループが発表し、全体で共有する。（出口議長

(ア) グループ構成

- ・出口議長、今泉委員、松岡委員、高原委員、安田委員
- ・片岡副議長、小田島委員、臼井委員、小野寺委員

(イ) 熟議テーマ

「地域学校協働活動がもたらす効果」

→委員が現時点で感じている地域学校協働活動のイメージ、メリットや課題感を含め協議すること

(5) 協議事項（熟議概要）

ア 出口議長班

- ・子どもと大人が触れ合う機会が増える。（出口議長）
- ・親や学校の先生だけではなく、地域のいろいろな大人と出会い、関わる機会が子どもの学びにつながる。（高原委員）
- ・子ども目線で考えてみると、自分の地域にはたくさんの大人がいることに気がつく。このことがまず必要。（松岡委員）
- ・制度が示す方向性と現場のニーズのギャップはないか、学校は地域と意欲的に関わっていこうという姿勢があるか気になるところ。（今泉委員）
- ・大人がいろいろ経験してきたことを生かす場となり、子どもたちに伝えることができる。それは大人の存在感や、やりがいにつながっていく。（出口議長）
- ・地域学校協働本部という新たな組織を設置するという事は、その運営のための会議など、仕事のための仕事が生み出されてしまう可能性があり、それは課題に感じる。（高原委員）
- ・地域目線で考えると、地域に言わずに学校のことは学校でやってほしいという思いもあるかもしれない。（松岡委員）
- ・地域にある、支援したい・関わりたいと考えている民間団体、企業やNPOなどの資源を学校にあったニーズで提供できると良い。地域のニーズにマッチした民間企業との連携が進んでいくと良い。（今泉委員）
- ・経済的に学校にしか居場所がない、学校にしか行けない子どもたちが地域と関わることで、自分たちの居場所を広げることにつながると良い。（安田委員）
- ・地域とつながることで、子どもの相談相手が増え、悩んだときに親だけではなくいろいろな人に相談できる可能性がある。実際に先進的に取組を進めている他都市の学校では、不登校が無くなったという実績もある。（出口議長）
- ・子ども自身が自分一人ではないという思いにつながる可能性がある。（出口議長）
- ・PTA活動でも感じる事だが、実際にやってみないことにはその楽しさに気づけないことがある。まずは参加してもらうことが大事。そして

子どもの役に立つという楽しさを感じてもらい、新たな参加者につなげる。そういった循環が重要。（高原委員）

- ・現状、学校が地域とやり取りするのは管理職が多い。他の先生方と地域のかかわりを生み出していくことが課題。（松岡委員）
- ・教員と地域にいる人との活動を通すことによって、隙間からこぼれない子どもの見守りの目、事前に見守る目、キャッチの目を、負担が少なく効率的に手厚くすることができる。大きくは虐待の未然防止の効果を狙うことができる。（今泉委員）
- ・子どもたちが抱える課題を、プライバシーの保護などがある中で、地域とどのように共有し、どう対応していくか、話題に出されるのを嫌がる家庭もある。ケースバイケースで対応するのだろうが、現実的には難しい。（松岡委員）
- ・課題を共有して対応を考えるのがコミュニティ・スクール。だが実際には、不登校などの事案が議題に出てくるのが少ない。一方、学校運営協議会委員には守秘義務があるので、学校がコミュニティ・スクールをどう活用しようとするか。過去に不登校を議題に取り上げ、成果を挙げた事例がある。（出口議長）
- ・いじめ問題も学校だけでは解決できる問題ではないので、地域と連携して取り組む意識が必要。（出口議長）
- ・地域での子どもたちの情報を積極的に学校に発信しても、その後の学校の動きが見えにくい。つながろうという意識の差かもしれない。この温度差を縮めることに向かう活動になれば良い。子どもが抱える課題に対して地域と連携して見守る姿勢があると良い。（今泉委員）
- ・参加したくてもできない子どもや家庭を救うためには学校の協力が必要不可欠。地域をもっと頼ってほしい。（安田委員）
- ・地域人材の協力による学習支援の実施によって、よりきめ細やかな教育ができる。多くの学習支援者によって、その子の学力に合った学習支援ができる。（出口議長）
- ・地域学校協働活動、コミュニティ・スクール、PTA、学校評価委員会などの住み分けが分かりにくい。もっと明確にした方が良い。（高原委員）
- ・地域と学校、両者の歩み寄りの方向性、程度、進め方が、住み分けに関わってくる。地域学校協働活動とコミュニティ・スクールはお互いに補い合うことができる。学校と関わりたいという地域の人と、学校も地域に頼りたいという双方向の関係が出てくると良い。（松岡委員）
- ・子どもの課題に対して、地域と学校の連携がうまくいかないという課題

がある。そこに、地域学校協働活動を挟むことで連携がうまくいき、継続的に子どもの育ちを見守ることができれば大きなメリット。教員の視野を広げることできる。（今泉委員）

- 学校が地域の資源に対して興味を示してくれない現状がある。地域と学校を結ぶ仲介役が必要。（安田委員）
- それが地域学校協働活動推進員というイメージ。（出口議長）
- 地域側からアプローチをすると学校としては対応が難しい可能性がある。導入時にスムーズなのは、まずは学校のニーズを聞き、こういった活動を支援してもらいたいというところから始めるのが良い。（出口議長）
- その為の組織がコミュニティ・スクール。子どもたちが抱える課題に対して学校、地域、家庭が何をすべきなのかを話し合う。それを実現するのが地域学校協働本部というイメージ。活動ありきで進めてしまうと、活動することが目的になってしまう。（出口議長）
- 先ほどの不登校の問題に対しても、子どもたちを学校に向かわせるために何が有効か、話し合いの場を設定し、その支援に必要な地域の様々な団体の協力を検討するのがコミュニティ・スクール。（出口議長）
- 学校のニーズがあるかどうかというのもあるが、そもそも学校として地域のいろいろな活動にどう関わるべきか分からないというのもあるだろう。（松岡委員）
- 地域の側からすると、いい活動をしようと思っているのになぜやらないのかという考えがあるだろうし、学校側の意見もある。（出口議長）
- 決して地域が活動を押し付けているわけではなく、学校と協力することで、学校と家庭と地域が連携して困難を抱えている子どもたちを見ていこうとしている。（安田委員）
- 最近は働き方改革にすごく意識を向けられている管理職が多い。今ある仕事以外の取組を進めると、先生の時間が取られてしまうという考え。それは本筋とずれてはいないか。（今泉委員）
- 皆の話を聞いて思うのは、劇的に何かが変わるようなものではないということ。ただ、こうして地域と学校の連携をテーマとして取組を進めることで、全員が少しずつ意識を変えていくことができるかもしれない。（高原委員）

イ 片岡副議長班

- 学校行事に地域の人たちがもっと参加するようになると、いろいろな活動につながるのではないか。地域の人が学校行事に参加するとコミュニケーションが生まれる。（臼井委員）

- 地域学校協働活動があることで地域の様々な大人が気軽に学校に入ることができ、子どもとのコミュニケーションが生まれる。また子どもにとっても、地域にはいろいろな大人がいるということがわかるきっかけになる。（小野寺委員）
- 子どもの顔見知りの大人ができる。地域の中で声を掛け合うことがなくなってきたので、活動を通じてつながる機会になる。（小田島委員）
- 最近では地域の出入りが激しいので、こういった見える化は大事。（片岡副議長）
- 子どもとの関わり合いを通じて、地域のお年寄りの出番が増えることで、お年寄りが元気になる。（臼井委員）
- 子どもを見守る目が増える。学校のことを知っている大人がいると子どもの安全・安心につながる。（小野寺委員）
- 地域の方が集まり、知り合うことで、孤立しない地域ができるのではないか。（小田島委員）
- 学校での学びは社会を学ぶことにつながるが、どうしても頭の中の知識だけになってしまう。地域との学びにつながることで、学んでいることは生きるために必要な知恵だと分かる。学びを深めるメリットがある。（片岡副議長）
- いろいろな地域の方が参加する活動は、様々な大人のロールモデルに触れる機会となり、子どもたちにとって、こんな大人になりたいというのが見えてくる。（臼井委員）
- 子どもの目線でいうと、知っている大人が学校に来ると嬉しいもの。こうした話題は、家庭での交流にもつながる。（小野寺委員）
- 知っている大人が増えると、子どもの自慢にもつながる。（片岡副議長）
- 地域の大人が気軽に学校に入れる環境は、地域が学校への理解を深めることにつながる。社会に開かれた学校といわれて久しいが、実際には、コロナもあって保護者ですら足が遠のいている。いろいろ機会があることで、学校に足を運び、学校はどんなことをしているのか知っていただけ。（小田島委員）
- 学生が体験に飢えている。何か言ってみたい、何か見てみたい。何かしてみたいという学生が多い。この取組が可視化されて、学生の力を据えるところがあれば、使ってほしい。（片岡副議長）
- 活動を通して地域に足りないものも見えてくるのではないかと。例えば、大人は中々やりたがらない「近所の知らない人に気軽に挨拶する」などの元気さ、親近感や子どもたちが自然にもっているもの。一緒に活動することで、自分たち大人や、地域に足りないものが見えてくる。（臼井委員）

委員)

- コミュニティ・スクールへとつながるきっかけになる。学校でも準備は進めているが、地域にどんな方がいて、その中の誰が力になってくれるのか分かりにくい。おやじの会や、昔からサタデースクールを実施していた学校だとつながりもあるが、そうでない学校は難しい。地域の方と少しでもつながっていくと、誰に何の話をしたらよいか分かるようになる。地域の人でも学校にどのように関わっていけるのか少しずつ分かるようになる。(小田島委員)
- 人選が大事。昔住んでいたアメリカでは、学校の評議員を選挙で決める。選挙の結果が原因で地域が分断することもある。(片岡副議長)
- 学びの場が多様になる。学校の中の学びで満足している子もいれば、現地学習に行き元気になる子もいる。学校の中で学ぶことも大事だが、自分の学びの幅を広げておくことも大事。地域から学んだことを、年を取ってから思い起こせるくらいの柔軟性をもつことが大事。(片岡副議長)
- 地域間のコミュニケーション、つながりが希薄化している。大人自身が地域にどのような人がいるのか見えてくるのは地域としてメリット。地域が学校の活動に関心を向け、地域の人たちが共通の活動することは、大人が自分たちの地域を再発見するきっかけになる。(臼井委員)
- 地域性、日時、内容によって、参加できる地域の人に限られてしまうことは課題。PTAにしても、いつも同じ保護者が参加しているというのが現実としてある(小野寺委員)
- 地域学校協働活動のコンセプトとして、「できるときにできることを」と言いつつも、ある程度の動員は必要。(片岡副議長)
- 子ども目線で、大人に認められる喜びがある。褒められたり認められたりすると、子どもにとって何かを完成したときの喜びを分かち合える。(小田島委員)
- 作ったものを作ったままにしないで、地域に共有できると良い。例えばアメリカでは、コンテストで優秀だった絵を地域のまちに貼ることがあり、親子で見に行ったりすることがあった。(片岡副議長)
- 小学校では、近所のスーパーとタイアップして絵を貼ることがある。中学校ではなかなかそういった機会がない。(小田島委員)
- 学校と地域、どちらかで学ぶというのではなく、地域を見直し、違う地域や他の区などはどうなっているのかと学びを深めることにもつながっていけば良い。(片岡副議長)
- コーディネーターの役割が大きい。その人の洞察力とか経験により学校

によって差がつくことが懸念される。（片岡副議長）

- ・結局は学校の教頭が頑張らなければならないということになると大変。（小田島委員）
- ・ネットワークが広がり、知り合ったり触れ合ったりすると諍いも増えるだろうが、そこを調整するのも地域の知恵。（片岡副議長）
- ・安定的に同じ方がずっと住んでいる地域と、入れ替わりが激しい地域では、学校やコーディネーターのハンドリングが変わってくる。情報共有も大事だ。児童会館がもっている情報は大きく、保護者の話など、学校に入ってくることもある。（片岡副議長）
- ・まちづくりセンターが町内会とつながっているため、役割が大きい。（小田島委員）
- ・地域の出入りが激しいことは、いろいろな大人に出会えるというメリットもある。また、コミュニティーが自立的に自分たちでいろいろなことを解決できるぐらい力を蓄えると、行政に頼らずに、自分たちで色々なことができるようになる。（片岡副議長）
- ・地域は身近であるがゆえに、学ぶ対象というよりは生活する空間。そこに学ぶというモードをつけるには工夫が必要だ。（片岡副議長）
- ・今の中学生はSNSでつながってしまう。昔のように地域の先輩方と遊ぶのではなく、札幌市全地域から集まって何かするということになる。そうすると大人の目が届かなくなる。個人と個人の繋がりまでは探れない。（小田島委員）
- ・学校がどんどん開けばいいのかというと、不審者の問題など安全安心が課題になる。（臼井委員）

ウ 各班からの発表

- 地域と学校の連携と、子どもへのかかわりや見守りについて
 - ・不登校などのいろいろな子どもたちがいる中で、隙間からこぼれない子どもの見守りを実現できるのがこの仕組みだ。
 - ・学校の閉鎖的な部分や管理職だけが対応していることに対する不安がある。管理職だけでなく一般教諭が関わらなければ地域学校協働活動はうまくいかない。
 - ・地域ができることや必要だと思うことに対する、学校の受け入れ体制に、難しさを感じる。
 - ・学校のことは学校で解決できるという意識が強い。先生方、特に校長先生の意識改革が必要だし大事だ。
- コミュニティ・スクールと地域学校協働活動について
 - ・コミュニティ・スクール、地域学校協働活動、PTA活動の住み分け

について、認識を一つにして議論することが大事。

- ・子どもの課題を共有して対応を考えるのがコミュニティ・スクール。学校がコミュニティ・スクールをどのように活用するかが重要になる。不登校やいじめの問題も学校だけでは解決できる問題ではないので、地域と連携して取り組む意識が必要。

○ 地域学校協働活動と「地域の大人と子どものかかわりについて」

- ・いろいろな大人のロールモデルを見る機会を通して、子どもが地域にいる様々な大人や仕事に気づくことにつながる。
- ・お年寄りの力が元気になるような施策ができる。
- ・学校のことを、どのように伝えと地域の方々に分かってもらえるのか課題。

○ 地域学校協働活動と地域づくりについて

- ・今はコミュニティ・スクールに向かう移行期であり、いろいろな課題が出てくる。
- ・コミュニティーはアメリカだと場としての意識が強く、見える化しているが、日本の場合は見えづらい。それがいい意味で地域を再定義することになる。今後の施策に関わらず、絶えずどうなのだろうかと考えることが必要。
- ・自立的に問題解決できるコミュニティーへ、自分たちのことは自分たちで責任を取ることができるコミュニティーへ、学校と地域が一つになって向かっていくと良い。
- ・今は学校単位で考えているコミュニティーを、区単位など違った単位で考えても興味深い。地域の枠を変えながらこの問題にアプローチするのも良い。

(6) 連絡事項

次回の会議は11月22日(金)10:00から、6階AB会議室で開催する。

また、次回の会議に先立ち、地域学校協働活動推進事業について、視察日を複数提案するので、各委員は都合のつく日程で参加していただきたい。